

伽婢子

江戸前期の仮名草子。瓢水子松雲（浅井了意）作。寛文六年（一六六六年）刊。

第五卷

幽霊評二諸將一

ゆうらいひょうす しよしやうを
かうしろう くんない

甲州の郡内に。鶴瀬安左衛門といふものあり。そのかみは恵

林寺の行者にて、後に安藏主と名つけしか。武田信玄にとり

入て心ばせ才覚ありければ俗人になされ小知給はり。鶴瀬安

左衛門とぞいひける。永禄丙寅七月十五日。孟蘭盆供のいと

なみしつゝ。甲府に出て家中拝礼の事相つとめ。日すでに暮

がたになりて恵林寺の快川和尚に對面せんとて。西郡におも

むき侍へりしにいかゞしたりけむ。めしつれたる中間小者あ

とを見うしなふて。一人も来らず。鶴瀬たゞ一人ゆくゝ恵

林寺にいたりしかば。門外にて多田淡路守に行あひたり鶴

瀬思ふやう。これは信玄公秘藏の足軽大将にて武勇力量す

に家中にゆるされ。名を近國の諸大将にしられ。信孛戸隱山

にをひて。鬼を切たるほどのものなるが。去ぬる癸酉極月

廿二日に。正しく病死びやうしせられたり。それに只今行逢いたるは。若夢もしにてやあるらんとあやしみながら。立よりければ。いざ恵林寺の庭に五三人あつまり。聖霊しやうりやうまつりの送りをいとなむによきつゝめでなり立入てあそび給へとて。打つれて。門の内に入たりければ。寺の庭に筵むしろしきわたし。中間小者ちうげんこものばらおほく人を待まふくるとおぼえて。うづくまりゐ侍へり。

註 日本古典籍総合目録データベースの「4 伽婢子、国文研、ナ4-952-1-13、刊、寛文6、25.6×17.8cm、大、13冊、200017016」(DOI 10.20730/200017016) の 125、126 コマ目に画像あり。